〈修士論文要旨〉

中途視覚障害者における障害の受傷から社会復帰にいたるまでの心理的変化とそのプロセスに関する研究

大　前　太　一*

1．問題・目的

近年さまざまな病気や事故により、突然視覚障害者となるいわゆる「中途視覚障害者」の数が増加している。

本研究は、人はどのような心理的な変容過程をへて視覚障害を克服していくのか。人生の途上で病気・もしくは事故により視覚に障害をきたした人が、障害と向き合い、社会復帰をとげるまでの心理的変化についての研究である。これは私が15年間の盲学校生活を通し、多くの中途視覚障害者と出会ったこと、そして彼らが強いストレスを抱えていたことがきっかけである。障害を心から受け入れることを「受容」や「克服」という形で言われている。これまで障害の変容に関しては多くの研究がなされてきた。その代表的なものは、障害の克服に段階的な心理的変容過程を経験する「段階理論」と、健常時の身体を基準とした生き方から、障害を負ったことによって変化した身体を基準にした新しい生き方に、できるだけ早く転換させることが重要だとする「価値転換理論」である。本研究では、特に段階理論をモデルに、中途視覚障害者の心理的変化について研究した。心理的変化をする上での、状況の変化、周囲との関係などから、受容を促進する要因、また妨げている要因について研究したい。

段階理論とは、次の５段階である。

1）ショック期

障害の発生直後で集中的な医療を受けているときの心理状態である。肉体的には苦痛であっても意識の上ではそれまでの延長上にあり、健常時と同じ日常生活のことをあれこれ考える。不安はあまり強くなく対人関係も問題ない。

2）回復への期待期

ショック期はあまり長続きせず、救急的な医療が一段落し、身体的状況が安定するとともにくる反応である。「傷さえ治れば」「病気さえ治れば」と考え、周囲の人との会話も治癒後の明るい見通しの下に約束などをする。

3）混乱期

治療を続けても変化が見られないことや、周囲の状況からそう簡単ではないことに気づき始める。自分の不注意を悔やんだり、加害者への攻撃・非難をする。そしてすべてを失ってしまった、なにもできなくなってしまったという嘆きの感情に支配され、深い抑鬱状態に陥る。

平成19年度　*社会学研究科社会学専攻（臨床心理学コース）

4）適応への努力期

毎日の訓練を通して価値転換が徐々になされ、周囲への心が開き始める。

5）適応期

具体的な問題を一つ一つ解決し、家族や地域社会の中で何らかの新しい役割を得ることによって再適応がはかられる。

この理論は、現在でも、リハビリテーション現場において、確固たる地位を占めている。

2．研究目的

本研究では、障害の受傷から社会復帰にいたるまでの心理的変化について中途に視覚障害をきたした人を対象に面接調査をし、受容することができた人、できていない人のそれぞれの要因、諸条件について考察をしたい。また、受容できていない人に対しては、援助の方法について考えている。

3．研究方法

青年期および中年期の視覚障害者およそ20人程度に対し、インタビュー調査を行った。なお、対象は、盲学校在籍者および卒業生である。

(1) 面接調査内容

盲学校在籍者には、障害の受傷から学校に入学するまでの期間および現在の学校生活について、卒業生には、障害の受傷から学校に入学するまでの期間と、盲学校在籍期間、盲学校卒業後についてインタビュー調査をしていく。面接方法は、半構造化面接を用いた。共通して質問する項目は、次の項目とする。

① 最も苦しかったこと
② 最もうれしかったこと
③ 支えになったこと（もしくは人など）
④ 立ち直れた要因はなにだと思うか
⑤ その期間にどのような援助が必要であったか
⑥ 今一番苦しいことはなにか
⑦ 突然の失明という中で、今抱えている危機感はあるか
⑧ 今後中途失明者が障害を克服するにあたって、なにが大切と思うか

である。

4．結果と考察

本論文で報告した事例は９事例だけであり、必ずしも一般論として断言できる結果ではないが、

その中で得られたことについて考えてみたい。

受傷から現在までの心理的プロセスを考察すると以下の点が示唆できる。

(1) ショック期

突然の失明という危機に陥り、たとえその事実を冷静に受け止めることができたとしても、それによって背負う心理的ストレスが大きいことは間違いない。もちろんインタビューをした9人についても同じである。

(2) 回復への期待期

今回のインタビューでは明確には聞き取れなかった。

(3) 混乱期

「どうして私がこんなことにならなければならないのか」、「これからどうやって生きていこうか」、という嘆きや抑鬱感があり、路頭に迷った、との言葉が聞かれた。

(4) 適応への努力期

それぞれ障害を受けたことを積極的に受容し、特に価値変換の感情がうかがえた。新しい生活をいかに過ごそうかという意識が生じてきた。

(5) 適応期

仕事をしたり、趣味を見つけたりして、生活の向上に努めていた。

しかしながら個人差もあり、以下の特徴があることが指摘できる。

(1) 受容している人は、支えてくれる人をかならず持っている。また、その支えを快く受け入れようとすることができている。

(2) 家庭を支えなくてはならないという危機感は、受容にもストレスにも大きな影響を持っている。

(3) 障害を受容する上で、趣味や欲求が大きな影響を持っている。

この結果、特に臨床家にとって注目すべき点は (3) ではないだろうか。これまで社会復帰を目指した多くの福祉現場では、視覚障害があっても社会生活を送れるための訓練であった。しかし、突然視覚障害を受傷し、悲嘆にくれ、抑鬱状態に陥った視覚障害者にとって、必要なことは、その人本来の人間性を取り戻し、その人らしく生きること、いわゆる自己実現を援助することではないだろうか。